

3-2 私と外邦図

三井嘉都夫（法政大学名誉教授）

私と資源科学研究所、法政大学、多田文男先生、田中館秀三先生との関係

私は1941（昭和16）年、法政大学高等師範部に入学しました。私の所属した高等師範部というのは夜学でありまして、地理・歴史科として設立されましたのは1937（昭和12）年でありますから、私が第5期生として入学したのはちょうど日米戦争の始まった年であります。地理学科は当時東大の地理学科の多田文男助教授を始め秋岡武次郎、渡辺光、岡山俊雄、新井浩といった先生方が兼任教授として教鞭をとって下さいました。ここで私は先ず最初に多田先生と出会うことになりました。戦争中は学業年数も短縮され、本来なら3年間1944（昭和19）年3月に卒業すべきところ短縮され、1943（昭和18）年9月卒業となりました。

ところで資源科学研究所と申しますのは、1941（昭和16）年12月8日の開戦記念日に、当時文部省の直属の研究所として青山の高樹町という所に設立されました。瀟洒な建物で、部門は地理、地質、動物、植物、人類といった分野でありました。私は、法政大学は夜学ですので昼間仕事が出来るといふことで何処か良い所が無いものかと探していましたら、ちょうど多田文男先生（先生は資源科学研究所員として東大との兼務で地理部門の主任として勤務しておられました）が、誰か資源科学研究所の職員にならないかと誘われ、1942（昭和17）年に

私は資源研に入所致しました。同年12月8日の一周年記念式典の壮大に実施されましたのも昨日の様に記憶しております。ところが戦況が厳しくなり、1945（昭和20）年5月には、高樹町の資源研は空襲で焼かれてしまいました。私は、1944（昭和19）年6月、1日教育招集という名のもとで名古屋へ参り、庄内川のほとりにある部隊で2ヶ月間無線の教育を受け、その年8月から翌1945（昭和20）年終戦を迎えるまで知多半島の太田川のほとりにある横須賀で無線兵として勤務し、その年の9月末に復員し、一旦郷里の富士市の実家に帰り、多田先生の呼び出しにより上京し、東京では住む所が無いので多田先生のお宅に御厄介になることになりました。まさに住うに家無く、食べるに米無く、着るに着物なしの時代に本当に多田先生には御厄介になったと恐縮の気持ちでいっぱいです。その多田先生も1978年3月15日に亡くなりましたが。

さて外邦図に係りのある資源科学研究所は、焼野原の新宿区百人町にあった旧陸軍の技術研究所跡の建物を一つ受け、但し、設立が開戦の1941（昭和16）年12月8日であり、軍に協力したとして、GHQの指図で文部省の直属から離され、助成金でやっていく事となったのであります。そして1971（昭和46）年3月を以って、最早戦後は終わったという名のもとに閉鎖されました。しかしその活動の状況は、1943（昭和18）年3月に出版された資源科学研究所彙報第

1号から1971(昭和46)年第75号(終刊号)までの研究報告その他の活動成果からも資源科学研究所の実態を良く知ることが出来ようかと思えます。まさしく研究員の月給は世の人の半額程度で苦しい生活を強いられて来ました。しかし研究員同志は親しく、よく勉強致しました。少し余分な事かとも思いますが、私のように居候している者は別として、家の無い人は研究室に寝起きしていた者が多かったのであります。私も多田先生の家から失礼した後は研究室の一部に住み且研究を進めていたこともあります。他人事で恐縮ですが、地理学研究室の某研究員などは結婚しても住う家無く、地理学研究室の大きな地図台の上で奥様と休み、私等が朝早くその部屋に入ろうとするとまだ二人は休んでいるような時もありました。しかしその後、研究所の屋敷内に焼け残った旧将校さんのバラックに既婚者4世帯(1世帯小さな1部屋)入れて貰う事が出来ました。私も結婚したのでその一部屋を借りる事になりました。この点は後にも申しませんが、いわゆる外邦図の監視には都合良かったとも考えられます。

さて法政大学文学部地理学科は、1947(昭和22)年旧制の大学令に基づく学科として誕生し、夜間のみ授業が開かれました。教授は野口保市郎教授、多田文男教授、岡山俊雄教授、新井浩教授、兼任教授として渡辺光先生等が居られました。私はこの段階で又多田先生に御厄介になり、指導教授をもお願いした次第であります。翌1948(昭和23)年には別紙記載の田中館教授が法政に迎えられ地理学科の主任教授となりました。

私等は主として田中館教授からは陸水学

などに関する講義をとくと承りました。ところで私は1950(昭和25)年卒業するや地理学科の研究助手に採用され、昼は資源科学研究所、夜は法政大学と一人二役の勤務を続けていました。田中館先生と、いわゆる外邦図の件についての話などは無かったが、地図の重要性は何時も強調されておりました。東北大学に移送された外邦図の移送に関しても田中館先生も力を入れておられたと浅井先生の書き物やその他の方々の報告からもわかりますが、なる程と理解されるような気が致します。しかし田中館先生は1949(昭和24)年6月病を得て新宿区新大久保の山手病院に入院され、1951(昭和26)年1月29日遂に逝去されてしまいました。享年66歳でした。

私と外邦図の関係

さて、資源科学研究所内の外邦図の整理、分配等に関しましては、浅井辰郎先生、中野尊正先生が詳細に書かれておりますので¹⁾、復員して帰って来た私は、多田文男先生のすすめにより市ヶ谷の旧陸軍参謀本部(現自衛隊市ヶ谷駐屯地)内に保管されていた外邦図の運搬移送についてその一端を聊か記してみたいと思います。浅井、中野先生も書かれておりますように、多田先生からの話では、渡辺少佐から市ヶ谷の参謀本部の地下室にある地図を学术研究の為に使ってほしいので持ち出してはとの事でありました。先にも述べました様に私は復員して上京し、多田先生宅に御厄介になり、新宿区大久保百人町の資源科学研究所に復職し、まだ纏まった仕事の明確にならない時でありましたので地図蒐集も面白からうと

思っておりました。早速参謀本部の地下室に入ってみますと、あるやある世界の地図と日本の地形図類が夫々の棚の上に乗っているのには驚いた次第であります。このような地図をどのように分類し、どのようにして運んだらよろしいかと最初迷いました。同じ図だけを沢山持ち出しても意味ないので先ず必要な地図を 10 部ずつ別々に集積して、後日運び出す事にしました。地図は面白いので分類中に地図を読んだりしていると時間がかかること大変なものでした。特に沖縄の 2 万 5 千分の 1 地形図、空中写真の原図の様な物まで出て来て、聊か感心した事なども忘れ難い思い出です。参謀本部での分類にどの位の時間をかけたかは忘れてしまいましたが、浅井先生も書かれております様に仕分けは出来たものの大量の地図を運び込むスペースが無い。新資源科学研究所に決まるまで、最初は大妻女子大学の倉庫に入れていただいたが、車が無いので肩に担いで毎日参りました。なお長く借りておくわけにも行かないので、次に、明治大学の倉庫を借りて保管するようになりました。この時は大八車を使って運び込んだ事も忘れ難い思い出となっております。大久保百人町の資源研は、米兵が毎日監視役の様に 2~3 人来ていましたのでなかなか地図を運び込む段取りが難しかったのであります。いよいよ資源研の地下室に集積するまでには、焼け野原に建てられたバラック小屋、金子材木店の一部に入れていただく事もお願いした次第です。とにかく資源科学研究所へ決まるまでには 3~4 回転々としたわけでございます。

資源科学研究所におさまるまでにはかなりの時間を要し、終戦の翌年位まではかか

ったと思い出されます。浅井先生も書かれております通り、資源科学研究所に運び込まれた膨大な地図は、一部は 2 階の廊下にある天井まで届く大戸棚に詰まっていたが、大部分は半地下室に埃をかぶったままになっているという状況でありました。この半地下室には先にも述べました様に何人かの研究員が寝起きしていたという状況でありました。浅井先生が 1948 (昭和 23) 年資源研に就職し、この地図に眼をつけられ、本格的整理が始められたのは 1959 (昭和 34) 年からでありました。浅井先生は法政大学の地理学科の学生をアルバイトとして頼み、膨大な全地図から 1 枚 1 枚を抜き出して国別、縮尺別、図番号別に集めるという作業に入り、その最も多く集まったものを A セット (15,857 枚) 次に多いものを B セット (10,338 枚) というようにして T セットまで計 20 組を作られました。これらの整理に尽力された当時学生であった飯田貞夫君 (現茨城キリスト教大学教授) 松永澄江 (現姓安岡) さん達の御努力には言葉に尽くしきれないものがあります。今でも飯田君はお目にかかると当時アルバイトしていた時代のお話をよくされます。

さてこれらの地図は浅井先生も書いておられますように、最初アメリカの目を恐れて隠匿されつづけましたが、1951 (昭和 26) 年に「サンフランシスコ平和条約が締結されたので、もうそろそろ動かしてもよろしかろう」という多田先生の御意見で、最初整理に着手されましたのは、1953 (昭和 28) 年頃、私やアルバイトの学生等の手で、国別、縮尺別に一部が整理され、大部分は未着手でありました。先にも述べました様に本格的整理に入りましたのは「立教大学ア

「アジア地域研究施設」が1959(昭和34)年に出来、地図を購入して下さることになって始まったものであります。

斯様にして大量の地図はその後「お茶の水女子大学への移管」と題して浅井先生が書かれているのもその通りであります。なおBセットの10,338枚は1971(昭和46)年～1976(昭和51)年にかけて京都大学東南アジア研究センターに納入されましてと浅井先生は申されております。なおC以下の各セットは、地域を一部限定された機関もありましたが、Cが立教大学アジア地域研究施設、Dが広島大学地理、Eは東京大学地理、Fは京都大学地理、他にドイツのルール大学、中国研究所、大阪大学(複写フィルム)、筑波大学、熊本大学など多くの研究機関に納入され、L以下の一部は資源科学研究所の地理関係者にも贈られ、後の僅かな残りは浅井先生宅に保管して今も頒布中であると先生は申されています。以上6万5000枚から10万枚近い地図が分配されているといえましょう。

注

- 1) 中野尊正(1990)『山河遙かに』私家版, 16頁. 浅井辰郎(1999)「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」清水靖夫・浅井辰郎・小林茂・安里進『大正・昭和 琉球諸島地形図集成・解題』柏書房, 23-26頁.